

東日本大震災復興支援報告

2012年3月9日から16日までの間、私は復興支援業務として福島県いわき市へ行ってきました。いわき市に到着し、いわき駅を出たときの第一印象は、きれいな町だということです。駅前的大通りは整備され、バスや乗用車が行きかっています。商店や居酒屋も営業していて、福山駅前と大きな差は感じられませんでした。私はもっと悲惨な状況を想像していたので拍子抜けしてしまいました。しかし、駅から宿泊するホテルまでの徒歩10分程度の間にも、地震の影響で歩道のマンホールが飛び出していたり、地盤がずれたせいか、路面と建物の基礎の間に隙間ができている場所が多くありました。震災の傷跡は、1年経っていてもまだ残っていたのです。



まちのいたるところで復旧作業が行われている。

翌日から復興支援業務が始まりました。業務としては、罹災証明書発行における建物の再調査です。震災直後に発行された罹災証明の判定に疑義のある市民が、再度の調査を依頼してきているので、私はいわき市の建築士協会から派遣された一級建築士の先生に同行し、依頼された各家庭を回り、被害の状況を調べました。

調査をしていると、様々な状況に出くわします。再調査をした結果に対して、不満をあらわにする人もいます。これは、一番低い被害状況である「一部損壊」と、次の被害状況の「半壊」とでは、補償に大きな差があるためです。しかし一方で、建築士の先生に建物の状態を見てもらいたくて再調査の依頼をしてくる人もいます。震災直後の一次審査は、とにかく多くの人に罹災証明を発行するために外観の調査をするだけに止まっています。再調査では、建物の傾きから内観まで調査をします。

再調査の結果に対して、我が家は無事だったと安心してもらえる人もまた多かったです。各家庭を回っていると、様々な話を聞きます。放射線が不安で洗濯物を外に干すことができない。飼っている犬が小屋で寝られなくなったので一緒に寝ている。床が傾いているので、普段生活をしているだけで頭痛や目まいがしてくる。話をされる人の中にはとても興奮して震災時の状況を語る人もいて、私たちはそのような話の聞き役にもなりました。そして、普段通りの生活をしたいくても出来ない、まだまだストレスはこの人たちのすぐ隣にあるのだと感じました。

一年が経った今でも、市民の生活も町の状況もまだまだ完全には立ち直っていません。私たちは、被災地の方々に対して「早く日常を取り戻してほしい」とよく言います。私は、日常とはどういうことなのか、どうなることが日常なのか、それはいつ来るのか、ずっと考えているのですが答えは出てきません。調査中、たくさんのありがたうの言葉をいただきました。いわき市の職員の方からも、人がいないときに来てもらいありがたうと感謝されました。東北の方の温厚さと我慢強さにこちらが勇気付けられ、私は福山へ帰ってからも、今この場所で自分が被災地のためにできることをやっけていこうと強く思ったのです。

南部生涯学習センター 國近 直明



「ふくしま復興の誓い2012」でのキャンドルナイトの様子

青年の父

山本瀧之助の足跡を訪ねて

若連中を改善し、青年団体を組織する瀧之助の構想は、沼隈郡内で広がったが、これを広島県内や全国へ広めようと考えた。1904年(明治38年)1月5日瀧之助は、いきなり広島に出向き、山田春三県知事との面談を試みたが会えず、その足で広島師範学校校長や中国新聞社の主筆を訪ね、青年団体の組織化について話し、青年団体問題について世論を引き起こしてほしいと請願した。翌1月6日、再び知事を訪問、県当局が青年団体に対し指導奨励すべきであると直言した。

これらの請願の成果は、すぐに具体化した。同年1月21日付の中国新聞に、弘瀬時治師範学校校長が「若連中改善について」を記事とし、また、同紙の翌日に「地方青年の自覚」を、さらに26日には「若連中の啓発」などの記事を竹岡風狭主筆が書いた。これを目にした瀧之助は、日記に「黒幕ここに在り」と記している。

さらに、国家中央へ青年問題について提起したいと考えていた瀧之助にチャンスが巡ってきた。4月26日、内務大臣芳川顕正が地方巡視で広島に来ることがわかり、直ちに広島へ出向いた。内務大臣には会えなかったが、同行の井上友一書記官と1時間半にわたって面談することができた。この面談は、阿武沼隈郡長の計らいがあったから可能となったのである。次号につづく

執筆：上田 靖士(山本瀧之助研究会)



視覚障がい等の理由がある人のために、営利目的を除き「録音」「点字」「拡大」などを認めます。